

〔書評〕

The Road Not Taken: A Prelude to a Theory of Humanities-Oriented Physical Education (行かない道—人文科学的スポーツ教育論序説—)

金炫勇 (広島大学)

近年、スポーツ科学において人文科学が注目されている。人文科学とは、広く人類の創造した文化を対象として研究する学問であり、哲学・文学・史学・語学などが含まれる(松村, 1995)。したがって、人文科学は、スポーツ科学と広い範囲で密接に関係しているものである。今回は、韓国のソウル大学教授で、スポーツ教育学において人文科学の必要性を提唱している Choi, E.C. 著『The Road Not Taken: A Prelude to a Theory of Humanities-Oriented Physical Education (行かない道—人文科学的スポーツ教育論序説—)』¹⁾を紹介する。Choi は、これまでのスポーツ科学の段階を「技術向上に注目した時期」「生理学・栄養学・運動力、心理学などスポーツ科学が本格的に発達する時期」「社会科学と人文科学的観点に研究領域が移る時期」など、三つに分けており、今後は社会科学と人文科学的観点に研究領域が移らなければならないという立場に立っている。

Choi は、まず、「はしがき」のところで、技術面においては優れているものの、人格形成できていないスポーツマンや指導者を取り上げ、彼らに指導を受けた学習者のスポーツ離れを指摘している。そして、彼は大学の教員として体育教師を養成してきた長年の経験から、体育教師を養成する大学のカリキュラムの中に、人文科学的スポーツ教育論が必要であると提案している。本の構成は、次のとおりである。

第一章「技のスポーツと道のスポーツ」では、技能中心のスポーツ教育の限界を指摘した上、技法と心法をともに身に付ける全人 (whole person) 教育の必要性を提案している。そして、第二章「運動の人文科学的効果—自己省察と洞察」では、運動は健康のみならず、内面的かつ深層的

変化にも影響を与えると述べた上、より効果的な運動のためには、自己省察と洞察を身に付ける必要があると指摘している。そして、その方法として文学、芸術、宗教、歴史、哲学などを通して「心眼」を養うことを提案している。そして、第三章「コーチングの心法的次元—コーチ教育への人文科学的接近」では、スポーツを指導するコーチは、スポーツ科学の専門知識のみならず、人文科学的知識も身に付けるべきであるとしている。また、従来のスポーツの指導が、オリンピックの標語である「Citius, Altius, Fortius」すなわち、「より速く、より高く、より強く」なる方法を教える競技力の指導に傾いていると指摘し、学習者の人格形成に影響を与える「真・善・美スポーツ」、すなわち「スポーツに含まれている真(本来の目的)・善(正しさ)・美(美しさ)」を味わう指導も並行すべきであると述べている。つまり、人文科学的コーチングの重要性を唱えている。そして、第四章「Hanaro (一つ) コーチング—Whole コーチングと Soul コーチング」では、技や競技力向上の指導など、技法的次元とともに心法的次元を体験し、それを理解させるコーチングについて述べている。つまり、日本武道という「事理一致」、すなわち事(技)と理(心)がともに育成される Whole コーチングと Soul コーチングを提案している。Choi は、学習者が技法的次元と心法的次元を直間接的に経験することによって、もはや全人 (whole person) 教育になり、良い人 (whole person)、そして、良い人生 (whole life) を生きることができると述べている。したがって、彼は、スポーツ学習を人の一生という叙事的体験として捉えている。そして、第五章「スポーツサイエンスマンとスポーツルネサンスマン—人文科学的ス

ポーツ専門人の教育」では、従来のスポーツ専門人(体育教員を含む)の資質は、経験(experience)から科学(science)へと移行し、現行のスポーツ教育はスポーツサイエンスマンを育成していると指摘している。しかし、現場ではスポーツ科学だけでは解決できない問題が多くみられる。Choiは、スポーツ科学の限界について、行き過ぎた科学化(over-scientization)や学問化(over-academization)では、スポーツの主体が人間であることを忘れ、本末転倒する可能性が高いと指摘している。そして、その教化策として人文科学的スポーツ教育論(Humanities-Oriented Physical Education)を提唱しているわけである。Choiがいう人文科学とは、第二章で取り上げた文学、芸術、宗教、歴史、哲学などである。たとえば、美術は動きを視覚的に鑑賞する力を身に付けるし、文学はグラウンドやコート以外で広がる人生の多様な領域を自己省察する力を身に付けてくれる。また、哲学は美的次元の鑑賞を提供し、その人の人生をより豊かにする。Choiによれば、スポーツ科学のみならず、人文科学をも身に付けた人こそ、スポーツルネサンスマンである。スポーツルネサンスマンは、人文科学的心眼(第一章参照)をもっており、競技に対する冷静な理性や専門的知識のみならず、温かい感性と人に対する愛、柔軟な想像力を持っている。Choiは、このような人こそスポーツ専門人・指導者として相応しい者であり、自分と学習者をともに成長させると述べている。そして、第六章「行かない道—専門体育人教育の再吟味」では、今日は「より速く、より高く、より強く」という量的成長主義から「スポーツに含まれている眞(本来の目的)・善(正しさ)・美(美しさ)」を味わう質的成熟へと移る時期であると述べている。本書のタイトルになっている「行かない道」とは、後者の道である。

Choiの主張は、もちろん全く新しいものではない。古代ギリシアのアテナイの教育では、心身の調和的発達を理想とした教育がみられるし、ローマの詩人ユウェナリス(Juvenalis, 60-130)は、「健全なる身体における健全な精神」が、こ

の世における幸福な状態であると主張している。また、イギリスのロック(J.Locke, 1632-1704)は、体育に関する論文集「教育論考」において、知育、徳育、体育のバランスが取れた教育を提唱している(川村ら, 1977)。また、「事理一致」つまり、事(技)と理(心)のバランス取れた理想的な武道の在り方は、沢庵宗彭が柳生宗矩に伝えてから日本の伝統的な技術観・身体観として残されている。つまり、知徳体のバランスが取れた教育は、昔から理想とされてきたものである。Choiは、欧米の大学(University of Georgia)で学位をとったこともあり、西洋と東洋の豊富な文献を用いて、また、体育教員を養成してきた長年の経験から人文科学的スポーツ教育論を提唱している。本書は、スポーツを学ぶものや指導者に人文科学的感性を身に付けるに資するものであると考えられる。Choiの著書が、今後、日本語訳され、多くの方が読まれることを願っている。

注

- 1) 本書は、韓国語で書かれている。英語タイトルは、著者が付けたものであり、日本語訳は筆者によるものである。韓国語タイトルは, 가지 않은 길—인문적 스포츠교육론 서설—である。Choiは、この著書以外にも、人文科学の立場から体育、スポーツ、コーチングを解釈した「行かない道2—人文科学と体育—」(2007)「行かない道3—人文科学的体育と逆錬金術」(2008)「コーチングとは何か—人文科学的コーチングの探求」(2013)などがあり、いずれも韓国語で書かれている(日本語訳は筆者)。

文献

- 川村毅・北村清治・福原麻子(1977) 体育学概論。大学教育者, pp.30-31.
- 松村明編(1995) 大辞林。三省堂, p.1312.
- Choi, E.C. (2006) The Road Not Taken: A Prelude to a Theory of Humanities-Oriented Physical Education. Rainbowbook.